

大津町墜落の陸軍四式重爆撃機飛龍について（最終報告）

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 事務局長
肥後考古学会 幹事 高谷 和生

資料の価値

- ①本資料は陸軍四式重爆撃機「飛龍」の機体部品資料である。
※国内での飛龍資料は3例目
- ②墜落機の部材資料から、部品特定が行える「良好資料」である。
※航空機部材は流星風防について8例、航空遺産では17例目

1 陸軍四式重爆撃機「飛龍（ひりゅう）」

- 陸軍四式重爆撃機「飛龍」は陸軍試作番号のキ番号を附し「キ一六七」と称する。昭和14年12月陸軍は三菱に対して「最高速度550キロ以上、500キロ爆弾を掲載して作戦半径1000キロを要求。攻撃の際は急降下が可能で、超低空で地上目標が飛び越せる、いわゆる垣根越し飛行ができるような軽快な操縦性が要求された」「三菱はこの要求を満たすためにハーロー四（2000馬力）を装備したスマートな双発機を纏めた」また「本機では新しい試みとして設計当初より大量生産を考えた設計を目標」とし、生産面においても「溶接作業は熟練が必要であり、又溶接後の処理にも相当の手数を要するので、キ一六七では出来る限り溶接部品を鍛造並ぶに鋳物に置換え、溶接は最小限にして」生産性を上げた。
- 乗員8名、全幅22.5m、全長18.7m、全高5.6m、航続距離3800km
- 当時の日本の大型機としては初めての試みとして胴体部を分割式にして量産向きとした。即ち胴体前端（前方砲座）、胴体前部（爆撃席部）、胴体中部（操縦席・爆弾倉部）、胴体後部二カ所部（側方砲座・尾輪・尾翼基部）、胴体尾部（尾部砲座）の6部から構成されており、この胴体部は、後述する県内各地の学校工場で分割生産することになる。最終的な組立作業においては、作業工程の分割・並行化、作業の近寄性の増大、組立治具の単純化、作業の機械化が図られた。その結果部品供給が十分で熟練工員が確保された名古屋航空機製作所では、月産最大59機（1944年11月期）、総生産数564機が記録されている。大戦後半期に登場した飛龍は「本格的な生産に入ったのは昭和19年からで、同年中頃には陸軍の機種調整に伴い、戦闘機は中島の四式戦、爆撃機はこの飛龍が指定され、以後集中生産に入り」、陸軍最後の傑作重爆撃機となった。
- 熊本での生産は42機（昭和19年4月2機をかわきりに最多で20年8月が8機）で、総生産機数は697機である。
- 本機はその操縦性が極めて良好であり、陸軍機としては珍しく魚雷搭載型も100機生産され台湾沖航空戦にも参加し、海軍でも「靖国」として採用し使用された。

2 熊本（健軍）飛行場

- 熊本飛行場は熊本市健軍町・西原町所在に所在する。健軍飛行場の別称を持つ。当初は三菱重工業株式会社熊本航空機製造所で生産する重爆撃機「飛龍（キ一六七）」の試験飛行のための飛行場として設営。
- 飛行場開設の詳細時期は不詳であるが、昭和19年4月の飛龍第一号機進空式には空港諸施設も南・西側に完成していた模様。昭和19年4月には大刀洗陸軍飛行学校熊本教育隊が、飛行場東側に管理区画を設け開校する。その後大刀洗飛行学校の廃校に伴い、実戦部隊の配備も行われ、昭和20年4月には、重爆隊の第六十戦隊の配置に伴い機能がさらに拡充。昭和20年5月の義号作戦では、沖縄に向け義烈空挺隊の発進が行われた。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となり、敗戦時は第六〇戦隊（重爆）、第一七独立飛行隊、第一七四飛行場大隊が配備。
- 滑走路は、現熊本日赤熊本病院前道路、南側に隣接する三菱航空機製造所の全長200mの総組立工場が、西部方面総監部内補給支廠の建物として現存し、義烈空挺隊慰霊碑も本所に移転されている。また、六十戦隊の墜落機慰霊碑が大津町外牧畑、西原村宮山の2箇所に建立されている。



健軍飛行場で敗戦を迎えた飛行第60戦隊第3中隊の重爆撃機「飛龍」爆撃機型 文林堂『世界の傑作機 飛龍』

3 資料収集の経緯、慰霊碑等

- 慰霊碑は菊池郡大津町外牧の畑集落の共同墓地に所在する。昭和20年7月5日夜間、第六十戦隊第二中隊所属の原正陸軍大尉ほか乗員7名の重爆撃機「飛龍」が悪天候のなか北

九州曾根飛行場より健軍飛行場への夜間訓練中に敵機と遭遇し、畑地区の北向山の通称「カグメ」の原生林に墜落した。戦後暫くは北向山に炎上の痕跡が残されていた。

戦後まもなく搭乗員を茶毘に伏した外牧地区に木柱慰霊碑を建立したが朽ち果てたため、平成2年7月5日飛行第六十戦隊第三中隊が中心となり、墜落地点により近い畑地区の共同墓地に一角に慰霊碑が建立された。

大津町矢護川地区の旧学校校舎を利用して大津町文化財学習センターが設けられており、その一角に本資料が展示されている。



畑地区に建立された慰霊碑

慰霊碑より墜落地点の北向山「カグメ」を遠望する。

大津町史の編纂事業に関わり、現地調査を実施し飛行機部品を回収してきたものである。主な物として尾翼方向舵、九五式自動操縦装置に関する接続弁、爆撃操作盤部材、主翼燃料タンク燃料蓋等、約20点である。

□飛行第六十戦隊では、昭和19年11月にそれまでの重爆撃機「呑龍」に替え、四式重爆撃機「飛龍」に機種を変更し、サイパン島のB29基地攻撃、硫黄島攻撃等の参加したのち、昭和20年1月末健軍飛行場に移駐し、沖縄攻撃に参加、健軍飛行場で敗戦を迎えた。本墜落時期は沖縄戦での組織的な抵抗が終了し、決六号本土決戦準備が九州地区で進められていた時期である。飛行第六十戦隊小史にはこの間の詳細記述が見られないが「戦力回復に努め又若年隊員の教育の為、関東州周水子飛行場に派遣隊を駐留し訓練を行った」時期であった。

□大津市教育委員会が児童生徒向けの郷土読本の平成13年3月刊行『おおづ ～いま・むかし～』には「墜落した飛行機」として本事例が紹介されている。

4 墜落機飛龍の部材

(1)「垂直尾翼の方向舵」

残存全長が210×80 cm、基部には径7 cm 鉄素材を用いた取付軸があり、取付位置側には「蝶番金具（通称はヒンジ）」が4基残されている。ヒンジ状況から昇降舵（フラップ）とも考えられるが、フラップならば上面が曲率有・下面はほぼ平面と、上下で面の曲率が異なるが、本品は同率であること、全長規模から方向舵と判断できる。



墜落機「飛龍」部材資料

大津町文化財学習センター

(2)「燃料蓋」

ステンシルにもあるように右もしくは左「翼1番タンク」の蓋である。刊行図面では「容量207リットル」となっており、現品のステンシルでは「208立」と記されているのが貴重である。

(3)「九五式自動操縦装置」に関する接続弁

「油弁接続図」の銘板がついており、方向舵・補助翼・昇降舵の油圧に関する接続弁である。本機に装備された「九五式自動操縦装置（super-ry autopilot）」に関する内油圧に関する接続弁と想定される。この部品がついた「油弁接続箱」は計器板の裏側に装着されており、ジュラルミン鋳物製である。

(4)「爆撃操作盤部材」

一部に銅線がまきついた、20個（0番～19番）の接続部が有る碍子製品である。現状では爆撃操作盤内部の「九四式10kg代用弾（演習用）の20弾用」の電気部品と想定できる。

(5)「脚軸受け部材」

リング状の鋼鉄を取り込んだ鋳物であり、より強度が必要とされる「主輪もしくは尾輪」の架構（フォーク）の軸受部と想定できる。

(6)「排気管部材」

径10 cm で押しつぶされて断面楕円となっているが、鉄部品特有の黒色塗装がなされており、耐熱鋼を使用した排気管と想定できる。

5 まとめ

□現在世界に「四式重爆撃機「飛龍」」の機体は現存しない。

国内には二箇所飛龍機の部品が残され展示されている。

①筑前町立大刀洗平和記念館：「ルーファンテナカバー」「爆弾倉扉」他

②青梅市郷土博物館：「プロペラ減速ギヤボックスとプロペラボスの結合体で、その中間に軽合金の冷却ファンが取り付けられている部分」「風防破片」「機体一部」「葉英」

□国内で3例目となる飛龍部材であり、県内航空遺産として貴重な資料である。



1 「垂直尾翼の方向舵」

残存全長が210×80 cm、基部には径7 cm 鉄素材を用いた取付軸があり、取付位置側には「蝶番金具（通称はヒンジ）」が3基残されている。



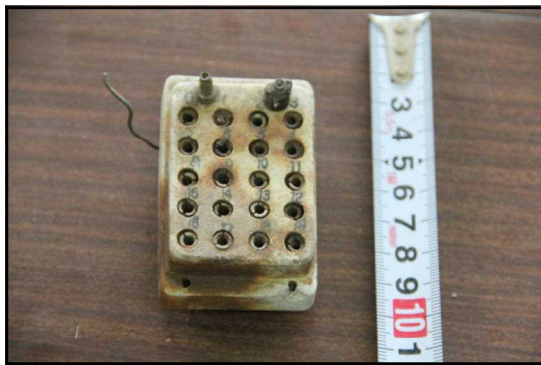
2 「燃料蓋」

右もしくは左「翼1番タンク」の蓋である。刊行図面では「容量207リットル」となっており、現品のステンシルでは「208立」と記されている。



3 「九五式自動操縦装置」に関する接続弁

「油弁接続図」の銘板がついており、方向舵・補助翼・昇降舵の内油圧に関する接続弁で、本機に装備した九五式自動操縦装置の資料である。



- 4 「爆撃操作盤部材」
20個（0番～19番）の接続部が有る碍子製品で、爆撃操作盤内部の「九四式10kg 代用弾（演習用）の20弾用」の電気部品と想定できる。



- 5 「脚軸受け部材」
リング状の鋼鉄を取り込んだ鋳物であり、「主輪もしくは尾輪」の架構（フォーク）の軸受部と想定できる。



- 6 「排気管部材」
径10cmの耐熱鋼を使用した発動機排気管部材と想定できる。

問い合わせ先・連絡先

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク
熊本の戦争遺跡研究会 理事 高谷 和生

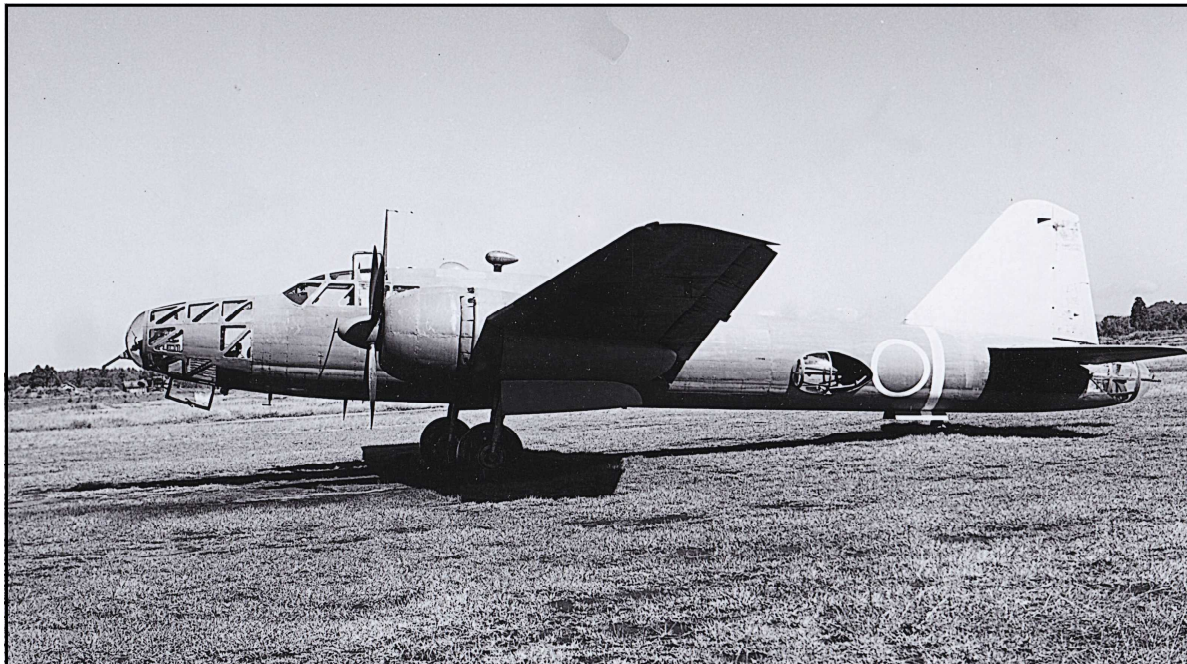
自宅／〒865-0061 熊本県玉名市立願寺126-5

TEL&FAX 0968 74-5030

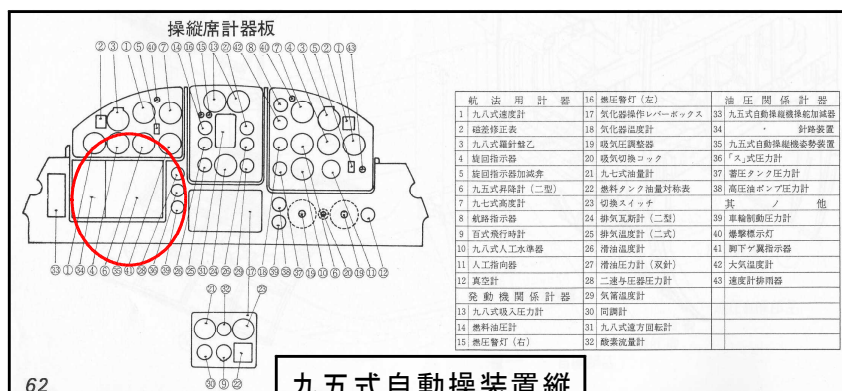
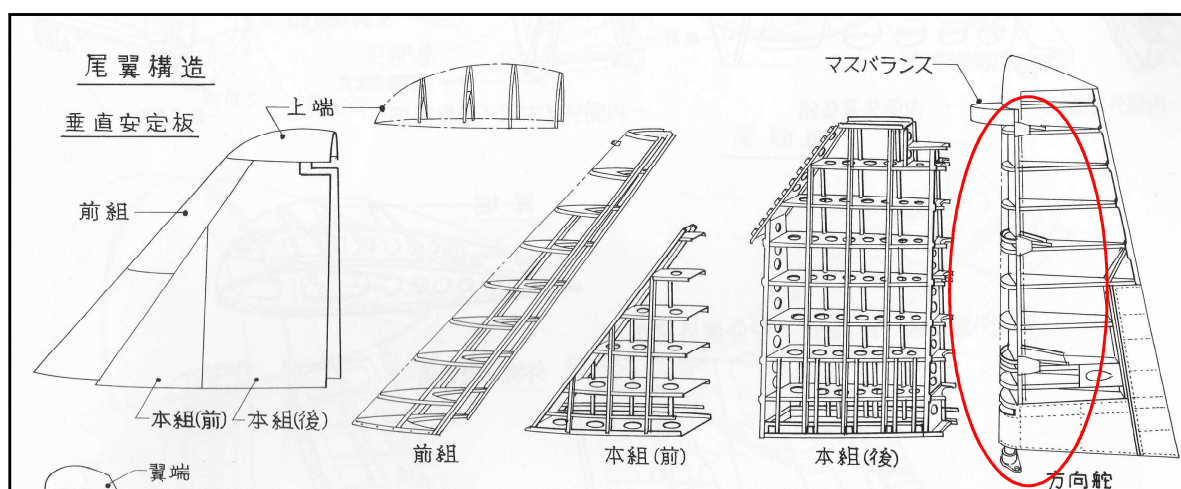
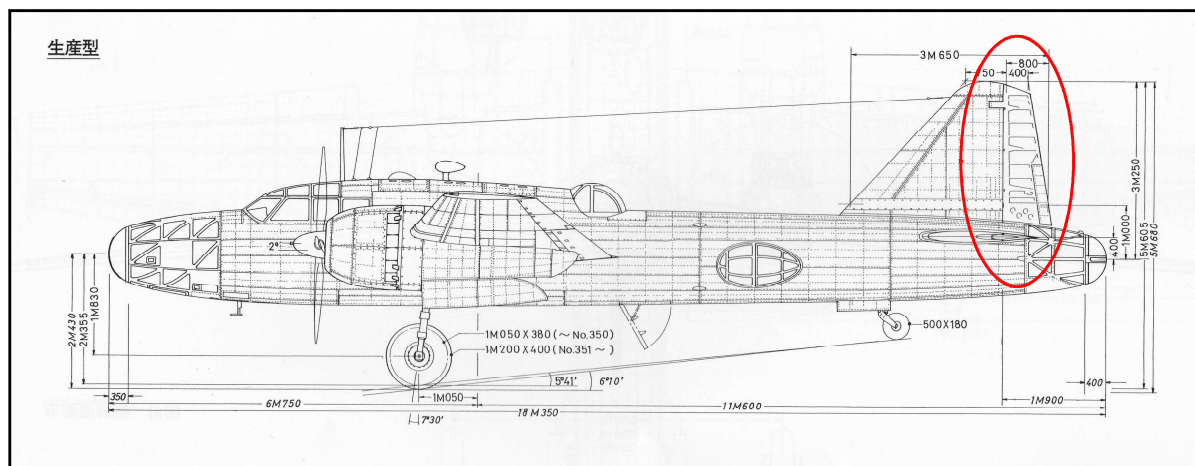
個人携帯 090-1513-5528

Eメール

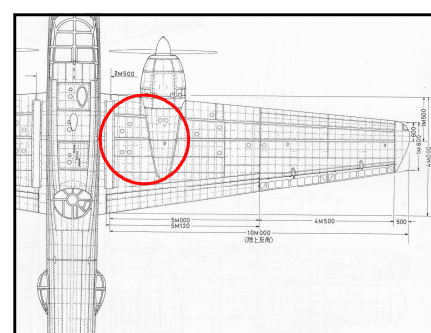
takayanagi912@yahoo.co.jp



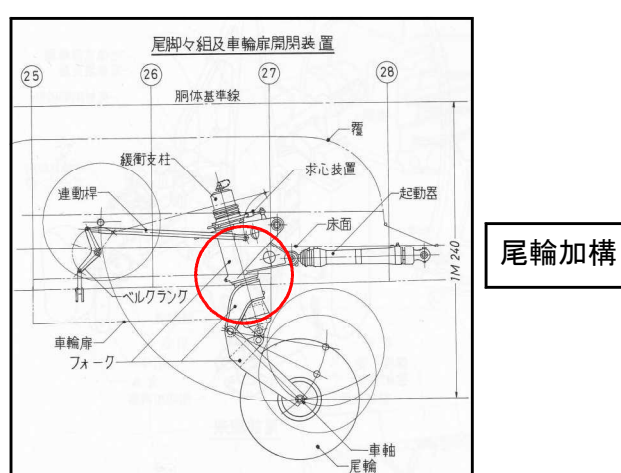
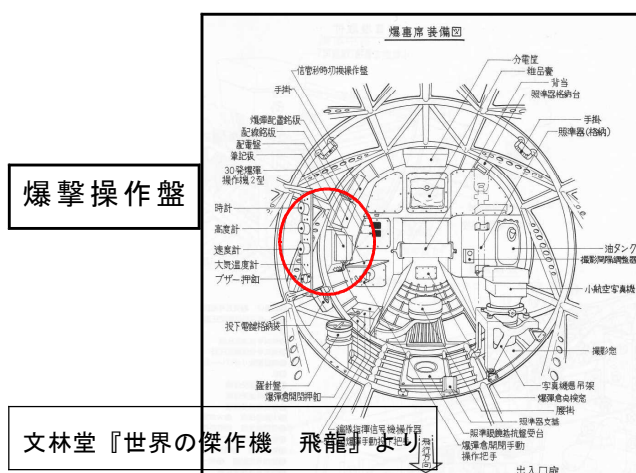
健軍（熊本）飛行場での四式重爆撃機「飛龍」
 敗戦後まもなく撮影された飛行第一七〇戦隊の各機。上段は170戦隊カラーリング、中段・下段は前両隊が混在、下段の背景は金峰山
 [杉山弘一氏蔵、杉山氏・高谷提供]

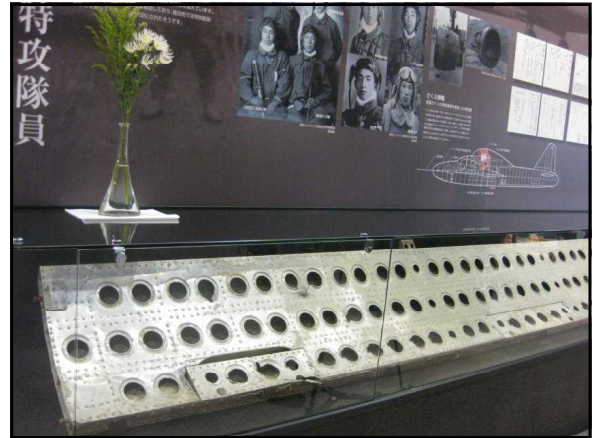


九五式自動操装置縦



燃料蓋





筑前町立大刀洗平和記念館所蔵の左「ルーフアンテナカバー」、右「爆弾倉扉」



青梅市郷土博物館所蔵

左「プロペラ減速ギヤボックスとプロペラボスの結合体で、その中間に軽合金の冷却ファンが取り付けられている部分」

右「風防破片」「機体一部片」「葉莢」

青梅市博物館HP・青梅市文化財保護委員連絡協議会活動報告書 2006